

आयुस् あーゆす

（発行） 京都文教大学・京都文教短期大学図書館
京都府宇治市楓島町千足80

●●●● 「大判棚」のたのしみ ●●●●

京都文教大学・京都文教短期大学図書館館長
総合社会学部 実践社会学科 教授（社会学、大衆文化論） 鶴 飼 正 樹

図書館の中でも目立つ中央にありながら、手にとる人はおろか、背表紙をながめている人さえほとんどの見かけないのが、「大判棚」だ。DVDの視聴ができるパソコンの反対側、ガラスのパーティション沿いといえば、わかつてもらえるだろうか。

ここには、サイズが大きすぎて普通の書棚におさめられない本が並んでいる。「サイズが大きい」というだけの理由で別置されているから、内容はさまざま。十進分類法にしたがって並べられている。

大きなサイズの本というのは、図版が多く、カラー刷りで、紙の質もスベスベのよいものが多い。だから、手にとってページを繰るだけでも楽しい。ただその分、多くの本はずっしりと重く、棚から取り出すにも、ひと苦労だったりする。

大判棚でいちばんスペースを占領しているのが美術書だ。その中でもとびきり大きいのが、『フェルメール全作品集』（小林頼子監修・著、小学館、2012）。大きすぎて、縦置きでは書棚におさまらないので、最下段に横向けに置かれている。

図書館にあるのは、限定1000部のうち「0218」の番号がふられたものだ。段ボールの箱の中に、さらに青い布張りの箱があって、その中に朱色の本が鎮座している。配架後10年以上になるが、私がはじめて中を開いたのではないだろうか。

『伊能図大全』という全7巻の本（渡辺一郎監修、河出書房新社、2013）もある。これは、江戸時代に日本全国を歩いて測量した伊能忠敬の「大日本沿海輿地全図」を収録した本だ。宗谷岬や国後島から屋久島まで、200年以上前にここまで正確な海岸線を描いたことには、驚くばかりだ。

学生時代、三重県の志摩から和歌山県の新宮ま

で、海岸沿いを自転車で旅行した。志摩半島のリアス海岸は、隣の港に行くのにひとつ峠を越さなければならないような難所の連続だった。伊能図では、そのリアス海岸も正確に描かれている。入り組んだ入り江の先に「古和浦」という、かすかに記憶に残っていた地名をみつけて、うれしくなった。

『日本プラモデル50年史』（日本プラモデル工業協同組合編、文藝春秋、2008）は、1958年に国産プラモデルが発売されてから50年を迎える2008年に発行された本だ。国産プラモデル第1号とされる原子力潜水艦ノーチラス号から、鉄人28号やゴジラ、スーパーカー、ミニ四駆、SFキャラクターまで、時代を映し出すプラモデルの写真を満載した、豪華なカラー版業界史である。この1冊で日本のプラモデルの歴史のすべてがわかるといっても、過言ではない。プラモデルの研究で卒業論文を書きたいという学生には必読文献だ。

私はとりわけプラモデル好きというわけではないかった。それでもサンダーバード2号や姫路城のプラモデルを作った記憶がある。私にとっては、懐かしく、驚異に満ち、本づくりにかけた執念を感じさせる1冊だ。

以上、とりあえず私の目につけたものを紹介しただけだが、大判棚には、あなたの関心を引く本がきっとある。

じつは大判棚の本の多くは、禁帶出ではない。『フェルメール全作品集』だって、借りて自宅で読むことができる。とはいものの、持ち帰るには、大きくて重い。だから、「大型図書の閲覧にご利用ください」と書かれた窓際の特等席で、ぜひページをめくってほしい。（うかい まさき）

❖❖ AI時代に本は必要なのか ❖❖

幼児教育学科 講師（社会学、社会福祉学、社会的養護）田 中 秀 典

最近、ChatGPTやGeminiといった生成AIが、生活の中でも仕事の中でも、その重要性を増している。私自身も生成AIに課金しており、日常的に利用している。気づけば、人間よりもAIと対話している時間のほうが長いかもしれない。

なかでも私がよく使うのはChatGPTである。日常生活でわからないことがあれば何でも教えてくれるし、研究の相談にも乗ってくれる。四六時中、議論できる相手として、いまや私にとって最高のパートナーになりつつある。

このように、私はAIヘビーユーザーである。そんな私が今回話題にしたいのは、「AIに聞けば大体のことはわかるのに、本を読む必要はあるのか」ということである。「ググる」という言葉すら時代遅れになるかもしれない現在、わざわざページをめくる意味はあるのだろうか。

結論から言えば、本を読むことはやはり重要だ。「きれいごと」ではない。いや、むしろAIの時代だからこそ、読書の価値は高まっているのかかもしれない。その理由はシンプルである。以下に述べてみたい。

AIはインターネット上にある膨大な情報を集めて学んでいる。いわゆる「ビッグデータ」だ。けれども、それはあくまで誰かが公開した一部の知識にすぎない。本に書かれているような、著者が時間をかけて考え抜いた思想や、人生の中で生まれた深い体験が含まれていないことが多い。つまり、AIが扱う「ビッグデータ」は、人間の知のごく一部しか反映していないのである。

そのため、AIにいくら質問しても、返ってくるのは表面的な回答に終わってしまうこともある。一方で、本にはAIのデータには載らない、人間の「思考の深さ」が息づいていることもある（本によるが……）。

この「思考の深さ」がないと、AIを使っていくようでは、実はAIに流されているだけかもしれない。

ない。AIの答えを「正解」として受け止めて、実際の行動に移してしまうからだ。AIの回答は、あくまでも「ヒント」として受け止めることが大切なのではないか。

AIを使っていることは、一見すると時代に合ったスマートな行動にみえる。しかし、AIを使いこなせる知識や思考がないと、逆に自身の「無知」と「不誠実さ」という二重の暴露をしているかもしれない。つまり、相手に「この人は自分の頭で考えていない。しかも、この内容で私に通用すると思ったんだ」と思わせてしまうということだ。

本を読んで知識と思考を深めることは、AIの回答を正しく理解する土台になる。AIを本当の意味で使いこなすためには、本を読み、自分の頭で考えることが欠かせないのではないか。

AIと本は、それぞれに異なる強みを持っている。AIは情報の世界を一気に広げ、知りたいことにすぐ手を伸ばせる便利さがある。一方で、本はひとつのテーマを深く掘り下げ、思考を深化させる時間をくれる。

私たちはこれから、AIとともに生き、学び、考えていく時代を迎える。その中で大切なのは、AIを本当の意味で使える側になることだ。AIの効率性と本の深み、この二つが組み合わさることで、私たちの学びはより豊かになっていくだろう。これからAI時代を生きるため、本は大きな力になると私は確信している。

最後に、以上の文章をChatGPTに「文章の内容に間違いはないか？ 私の言っていることは本当に正しいのか？」と質問してみた。するとChatGPTは、「あなたの主張は、現在のAIリテラシーや教育哲学の議論と一致しています」と回答した。教育哲学は議論が一致するほど浅いものなのだろうか……。改めて、AIの回答を「ヒント」に収めたいと感じた。

（たなか ひでのり）

＊＊ 文字の間に息づく気配 ＊＊

臨床心理学部 臨床心理学科 3回生 坂 口 七 海

私は小さい頃から本を読むことに苦手意識があった。今でも本を読むことは得意ではなく、自分にあわない本だと酔ったような感覚を抱くことがあります、文字を読む作業を苦痛とさえ感じる時がある。

そんな私は、国語が大の苦手であった。授業中は国語の教科書に散りばめられている数少ないイラストを眺めてはぼーっとしたり、落書きをしたりして、なんとか国語の時間をやり過ごしていた。休み時間までもっぱら本を読んでいる友達のことが理解できず、茶化してしまった出来事も思い出される。しかし、こんな私でも本によって不思議な体験をさせてもらったことがある。

高校生の時、中島敦の『山月記』という短編小説に出会った。高校の国語教科書にも採用されているので、知っている人は多いだろう。この本が、私が初めて本に引き付けられたきっかけとなったものである。

国語が苦手な私は、いつものように少しめんどくさいと思いながら、仕方なくこの小説を読み始めたに違いない。しかし物語を読み進めるにつれて、いつものような酔った感覚は一切なく、物語に没頭していった。特に主人公である李徵が虎へと姿を変えながら無我夢中で山林を駆けていく描写があるのだが、この描写で私は一気に『山月記』という物語の中に吸い込まれていくような感覚がしたのを今ではっきりと覚えている。

「自分は声を追うて走り出した。無我夢中で駆けて行く中に、何時しか途は山林に入り、しかも、知らぬ間に自分は左右の手で地を攫んで走っていた。何か身体中に力が充ち満ちたような感じで、軽々と岩石を飛び越えて行った。」

この文を読んだ瞬間、自分の身体全体が物語の

中に溶け込んでいくのを感じた。無我夢中で駆けて地を攫んで走る感覚、身体中に力が充ち満ちたような感覚、岩石を軽々と飛び越えていくような感覚が、ただの描写ではなく、自分のものとしてはっきりと、身体とともに感じられたのだ。

この感覚は、私にとってまったく初めてのものであり、なおかつ、それが小難しい古典の文章を通して得られたことにも驚いた。これがきっかけとなり、私は中島敦の本をいくつか読み、決して数が多いとは言えないが本を読むようになった。

ただ、今でも自分にあう本とあわない本があり、読み始めるとすぐに気分が悪くなることも少なくない。しかし、自分にあう本と出会う瞬間はとても素敵な瞬間であると感じる。本の中に溶け込む感じ、溶け込んでいる間は時間なんて忘れるし、とにかく夢中になることができる。

また、本を読み終え、本の世界から戻ってきた際になぜ自分がこの本に溶け込み、夢中になったのかを考えてみるのも面白い。『山月記』では、主人公李徵は人間から虎へと姿を変える。『山月記』で表現されているこの「人間としてのうつろいやさしさ」が、ちょうど「自分とは何ものか」という問いに圧倒されていた高校生の頃の私の関心を強く引き付けていたのかもしれないと考えたりしてみる。

とにかく、私は本をあまり読まないので本の良さをまだまだ理解しきっていないが、本に溶け込み、夢中になる体験はとても不思議な体験であり、多くの発見があると改めて感じる。これからも自分のペースで、本による不思議な体験と発見をしていきたい。

(さかぐち ななみ)

なぜ読書離れは起きるのか／秘密の代償

臨床心理学部 臨床心理学科 1回生 東海林 匠

なぜ読書離れは起きるのか

本が大嫌いだ。読んでいると途中で眠くなってくるし、疲れていると、文字を追うという行為そのものがおっくうになる、という人が私の友人いる。「ははん、となると『かいつけゾロリ』とか『怪談レストラン』なんかも小学校の図書館で借りなかつたのか」と思つていたのだが、どうも小学生の時はたいへんな読書家だったらしい。ところが、年齢を重ねるにつれ、いつの間にか読書離れしていたそうだ。どうしてなのだろうか。

疑問に思った私は、6月から9月まで、「宇治市未来キャンパス」という、高校生、大学生が、地域の課題解決に関わりながら、事業づくりを学ぶプログラムの中で、子どもの読書離れの原因を調査した。宇治市内の小中学校に勤務する司書さんにヒアリングを行つたところ、「学年が上がるにつれて、児童の読みたい本の好みに個性が出てくるため、お薦めするのがむずかしい。とりわけ小学校中学年で読書量はガクンと減る」とのことだった。司書さんは本のプロフェッショナルだが、子どもひとりひとりの好みを把握することは不可能である。また、児童たちが突然本に興味をなくすのではなく、興味を持てる本が自分でもわからなくなっていくことが、読書離れにつながっているのではないかと考えた。

司書さんと子どもたちの間にあるその溝を埋めるために、私は読書のプロフィール帳を作成した。プロフィール帳の質問に答えると、自分の好きなジャンルや最近読んだ本が司書さんに伝わる仕組みになっている。プロフィール帳にした理由は、学童保育の先生から「アンケートをするにしても、子どもたちが楽しめる内容にすべき」と助言をもらったためだ。今後はこのプロフィール帳をもとに司書さんから本を薦めてもらい、結果としておもしろい本に出会えるようになったのかを検証していく予定である。

今回の活動を通じて、子どもが本と出会うには、周りの大人がその興味をつなげる役割をすることも大切だと感じた。読書はひとりの行為のようでいて、実は人との関わりの中で育つのかもしれない。

秘密の代償

これを読んでいるあなたも、人には簡単に言えない何かしらの秘密を持っているだろう。それは当然のことだし、必ずしも悪いこととも限らない。ただし、私たちは秘密を持った代償を引き受けねばならない。『青の炎』貴志祐介著(角川文庫2013)によって、私はそのことに気づかされた。

主人公の柳森秀一は、由比ヶ浜高校に通う17歳だ。義理の父・曾根隆司は、「表面上は人当たりがよかったが、実際には怠け者で酒乱、ギャンブル中毒で女癖も悪いという最悪の男」である。家族を守るため、秀一は曾根を殺すことを決意する。

私たちは殺人をしたことがない。それが完全犯罪を狙った計画的犯行であれば、なおさらだ。だが、本作を読み進めるうちに、殺人前後の心情のひとつひとつが決して他人事でないことに気づく。

例えば、人殺しを隠しながら生きる中で、抑うつ状態になる場面がある。「現在のような状況にならなかった場面について、繰り返し夢想する」との描写に、私は「どうしてこんなことになったのだろう」と過去をほじくり回し、堂々巡りをしていたときの息苦しさを思い出した。

物語後半では、秀一の友人・石岡拓也に義父殺しがバレてしまう。拓也は口止め料として現金30万円を要求する。これを受け、秀一は曾根のときよりもあっさりと、拓也を殺す計画を練り始める。

30万円で口をつむぐというのは、一見、軽い代償に思える。それでもなお、秀一が拓也を恐れたのは、義父殺しの隠蔽よりも、秘密を共有する関係に耐えられなかったからではないか。私自身も、友人からお悩み相談をされた後、「なんか話を聞いてもらいたすぎて逆に不安になってきた」と言わされたことを思い出した。

物語のおもしろみとは、自分が経験したことのない感情を、あたかも自分のことのように感じられる点にある。それは、理解されがたい他者と分かり合おうとする試みでもあるのではなかろうか。

(しょうじ たくみ)

✿✿✿ 私のすすめる3冊（私の推薦図書）✿✿✿

総合社会学部 総合社会学科 講師（社会心理学、利他行動） 山 本 佳 祐

◎『信頼の構造』

山岸俊男 著／東京大学出版会 1998年

他者を信頼する心はどのようにして育まれるのだろうか？初対面の人と関係性を構築する際、まずは相手を信頼しないことには仲良くなれないだろう。一方で、相手が自分を裏切ってくるかもしれないという警戒心を持つことも必要である。日本人は後者の傾向が強く、すでに仲良くなつた友人に対して信頼するが、見ず知らずの初対面の他者に対して警戒心が強い。グローバル化に伴い、日本においてもアメリカのように、人間関係が流動的になりつつある中で、見ず知らずの他者を信頼する心を備えておくことは重要であるだろう。本書は、そのような問題意識のもとで、どのような社会環境において他者を信頼する心が構築されていくのかについて実証的な実験データをもとに議論されている。山岸先生のスケールの大きな理論構築と論理的な文章に圧倒されるこの著書は私のバイブルである。

◎『星を継ぐもの』

ジェイムズ・P・ホーガン 著／池央耿 訳／東京創元社 1980年

この作品は、様々な分野の科学者が、月面で発見された人間の遺骸のようなものの正体を究明するSF小説である。この作品最大の魅力は、物語で登場するダンチェッカーという生物学者の人間性にある。ダンチェッカーは中盤まで、頑なに自分の仮説が正しいと考え、周囲の主張を突っぱねる堅物であったが、終盤には自分の考えを改め主人公チームに協力的になる。ダンチェッカーは単なる頭でっかちではなく、他者と考え方は違えど真実を追求することに情熱を注いでいただけであった。私自身も研究者の立場であるが、自分の仮説が正しかったときには、つい喜びを感じてしまう。しかし、大事なのは自分の仮説が正しいかどうかではなく、真実を解き明かすことである。自分の仮説が誤りであるならそれを素直に認める柔軟性をもって、真摯に研究と向き合いたい。

◎『檸檬』

梶井基次郎 著／青空社 1925年

まずこの作品は面白くなかった（※個人の感想です）。というか、著者がこの作品を通して何を伝えたかったのか理解できなかった。そんなものを薦めるなという話であるが、このわからなさが私の中で強烈に残っていたので取り上げることにする。この短編小説は、主人公が鬱々とした感情に苛まれている様子が描かれている。私はこの作品を中学校の教科書で出会うことになつたが、訳がわからないという激しいストレスに襲われた。それから年月が経ち、大学院時代にふとこの作品のことを思い出し、今ならわかるかもしれないと読んでみた。……が、全く意味がわからなかつた。ただ、このような人の心のわからなさは、現実の社会でも出会いうる。自分には理解できない他者の心にも、ときには目を向けてみることが必要なのかもしれないと思わせてくれる作品だつた。